

## 医療福祉活動の先駆者・長谷川保

寺田伊勢男

### はじめに

戦後、静岡県福祉事業を推進したのは、弱者に目を向けた日本社会党に何らかのかかわりを持った人たちであった。彼らとその核になり、さらにそれにつながる人々が草の根の福祉の運動を広げていき、その運動の後を追うように、行政が現在の福祉制度を整えていったのである。

ここではその先駆者とも言うべき長谷川保と聖隷福祉事業団について紹介する。

長谷川保（1903～1994）は、保健、医療、福祉、介護サービスで地域に貢献する聖隷福祉事業団の創設者である。長谷川はクリスチャンとして「不治の病」といわれた結核患者の救済・更生に取り組み、戦後は日本社会党の衆議院議員として活躍した。

長谷川が代議士となったのは、結核が蔓延し生活苦にあえぐ人々の救済のためには、個人の力だけでは解決できない、国家的な制度を確立する必要があるということであろうが、国会議員に挑戦し、戦後第1回の衆議院議員選挙で見事当選を果たした。日本国憲法制定議会では、第25条の「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する・・・」に強い意欲を示すとともに、福祉医療の現場と立法府である国会とを結び付けた。

### 1、長谷川保と聖隷福祉事業団

#### (1) 長谷川保の福祉・医療への思い

長谷川保は、1903年9月3日、浜松市高町で生まれた。長谷川が浜松商業学校を卒業するころ、第1次世界大戦後の戦後恐慌の波が押し寄せた。長谷川は自分が海外へ行けば日本の失業者が1人減るとブラジル行きを決心し、東京へ出た。1897年島貫兵太夫牧師が創設し、キリスト教信仰に基づく「霊肉救済」を唱えて海外移住事業を行っていた日本力行会海外学校に入った。同校では、校外で著名なキリスト教指導者に学ぶことを課していたことから、長谷川は、当時大手町衛生会館で開かれていた内村鑑三の聖書研究会に参加するようになり、ここでキリスト教と内村鑑三に大きな影響を受けた。そして外国へ渡った時に、生計を立てる手立てとしてクリーニング技術を身に付けることがよいと考え、洗濯屋の修業を行った。1921年9月、長谷川は、外国には行かずに日本で日本民族の救いのために働くよう命ずる神の声を聞くという霊的体験をし、日本にとどまり日本の同胞のために働くことを決意した。1923年、20歳になった長谷川は兵役のこともあり浜松に帰郷した。そしてその年の11月、植村正久が設立した日本基督教会浜松伝道所で植村正久の司式により大野篁二とともに受洗した。

兵役を終えると再び上京し洗濯業の修業を続け、1926年浜松でクリーニング屋を開業した。そして大野篁二とともに「聖隷社」と銘打って社会福祉事業を始めた。「聖隷」とは、

神の聖なる隷（しもべ）という意味である。大野は和地山に1ヘクタールの荒地を借りて畑をつくり、聖隷社農場と名付けた。そこにはアルコール中毒患者や精神薄弱の少年などが身を寄せたが、利益は出ず生活は大変だった。

この年、日本楽器の大規模な労働争議が起こった。長谷川は見解の相違から浜松伝道所を離れ、共産党系の静岡県無産青年同盟の幹部として活動するが、それにも失望し、1927年には同盟を離脱、翌年4月、再び上京して高倉徳太郎が校長を務める東京神学社に入学した。1929年帰浜し、長谷川はクリスチャンとしてまた福祉活動に邁進した。

ところで「聖隷社」の仲間である鳥居恵一は、浜松市広沢に谷島屋書店の経営者の好意で土地を借り、愛耕園と名づけて花の栽培を始めた。1930年、そこにあった小さな建物に行きどころのないひとりの結核患者を受け入れた。当時結核は不治の病として恐れられ、近隣住民や土地所有者から立ち退きを求められ、移転を余儀なくされた。長谷川らは、「日本の同胞のため」の活動を、結核患者への奉仕とした。長谷川は福祉活動の資金源であったクリーニング店をたたみ、みずからが看護の担い手となろうと決意した。その後ベテルホームと名付けた施設は、転々と居を変えながらも奉仕者と周りの理解に支えられ維持継続されていった。

信仰による精神生活と自然療法による肉体の回復をめざし、貧窮の患者を療養するベテルホームのうわさは各地に広がり入所希望者は後を絶たなかった。長谷川保が依頼した「イエスの友の会」（賀川豊彦主宰）からの献金の受領が決定することにより、三方原の県有林の払下げが可能になり、「聖隷保養農園」としての開墾が始まる。そして多くの人々の善意により病棟ができ結核患者の受け入れが進んだ。しかし1937年6月号の雑誌『主婦の友』に載せられた好意の記事（賀川豊彦「貧しい入病患者の憩いの家—浜松のベテル・ホーム」）が地元の反対意見を導きだす一方、全国から貧しい結核患者が押し寄せるようになった。借金が増え、閉鎖を迫られる状況の1939年12月、天皇から5000円の下賜金が与えられ、周りの状況が一変した。浜松市長や織物組合理事長などが「聖隷保養農園賛助会」を結成して募金活動を展開するようになり、1942年、「聖隷保養農園」は財団法人となった。

## （2）衆議院議員に当選、憲法、生活保護法に関わる

1945年の敗戦から1週間後、園長長谷川保は、職員と戦災で焼け出されて避難してきた人たちに呼び掛け、未開墾地を開墾し食糧増産に励み、養豚や養鶏も手がけ聖隷保養農園の経営に努めた。しかし大都市を中心に世の中は荒れ、建物もなく餓死者が出る非常事態を見て、政府や外国の力に頼らなければ社会事業を展開することは難しいと判断し、長谷川保は総選挙に出馬することを決意した。全県1区という選挙区で、日本社会党からは駿豆支部から宗秋月、沼津支部から山崎道子、静岡支部から渋谷昇次、西遠支部から長谷川保が立候補した。行く先々で、聖隷の長谷川に助けられたと言って、宿を提供してくれたり手弁当での協力を惜しまない人々の支援を得て、「救国運動」と呼ばれた長谷川支持の選挙運動は盛り上がった。1946年4月10日の投票結果は、山崎道子が静岡県で最高点、長谷川保は西部の候補者中最高点で、渋谷昇次も含め3人が当選した。国会議員となった長谷

川は、友人からもらった国民服を着て上京した。東京は焼け野原であったが、教会の仲間の家の二階に下宿することができ、そこを拠点に議員としての活動が始まった。

日本国憲法第 25 条の「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」という条項が掲げられたのは、日本社会党の議員が尽力した結果であることはよく知られている。そして長谷川もその一員であった。とりわけ長谷川は、「健康」を条文中に入れることに努力したという。「健康」の大切さをもっとも大切だと考える長谷川の意思是、長谷川の今までの活動から当然導き出されるものであり、またそれを「権利」としたことは、その後の生活保護法制定に関わる国会審議でも強調したこともあった。

長谷川保は「八百万の人を餓死から救わなければならない」という思いで衆議院の生活保護法案委員会の委員となった。そして 1946 年 8 月 15 日に、こう主張したのであった。

国家は国民の最低生活を保障する責任があり、国民は之を要求する権利があります、国家が国民の生存を保障し得ず、政府が国民の最低生活を守り得ずして、国民が餓死するとするならば、国家に何の権威がありましょう、政府はないに等しいので、此の故に国家が国民の最低生活を保障するのは当然であり、更に進んで是等餓死線上にある人々の生活を絶えず向上させることを努力しなければなりません、今後の激しかるべき労働争議に於ける勤労者の要求は、窮極する所又此の最低生活の保障を要求する悲痛なる血の叫びであります、而も大いなる悲劇は、多くの企業自体が今や採算割れに立至って居る現実であります、是れ故に国家が本法に於て国民の最低生活を保障し、国民をして最悪の場合に於ける保障を、得せしめ安んじて国家再建の為に後顧の憂なく全力を尽くして凡ゆる方途を策せしむるは又喫緊のことでもあります、国民の最低生活は断固保障されなければなりません、最も微力なる国民の生活が安全に確保せられて、そこに初めて真の民主国家があるのです、此の理由を以て我が社会党は第一条を「この法律は、生活の保護を要する状態にある者の生活を、国が差別的又は優先的な取扱をなすことなく平等に保護して、その最低生活を保障し社会の福祉を増進することを目的とする。」と修正せられんことを提案するものであります。

同時に、社会事業家育成のための学校や講習会制度を設けること、社会事業施設を建築しやすいうように軍や軍需工場の古い施設を無償で開放すること、結核患者に必要な不可欠な食料を配給にプラスすることなどを求めた。

長谷川は、1946 年 7 月 24 日の生活保護法案委員会で、こう語った。

元来保護事業、社会事業と云うものは「ビジネス」ではありません、愛の事業であります、要保護者に対しまして、一切の愛を尽くし、親切を尽くして、而も必ずしも感謝を以て報いられるものではありません、一切の親切を尽くした後に尚お怨まれるようなことが屢々あるのであります

す、一切の親切を尽くし、愛を尽くした後に、怨まれて尚お心秘かに自ら愛の業をなし得たことを感謝し、又怨む人に向うて其の祝福を祈ると云うような心でなければ、真の社会事業、保護事業は出来るものではありません。

クリスチャン長谷川の社会事業に対する精神がここに示されているとってよいだろう。

1946年9月に生活保護法(旧法)が成立すると、長谷川は地元で母子寮の建設に着手する。浜名湖畔の弁天島にあった中島飛行機の土地と寮を静岡県に払い下げてもらい、そこに母子ホーム弁天島同胞寮を建てた。

日本国憲法や新しい日本を方向付ける様々な法律制定に尽力した長谷川であったが、1947年1月、公職追放の知らせが入った。公職追放は、軍国主義者、国家主義者を対象にしたもので、戦時中、聖隷保養農園が迫害されたとき、園の味方をしてくれた村長から頼まれて、三方原村翼賛壮年団長をしていたことが理由であった。

### (3) 医療の充実に邁進

長谷川は公職追放解除になった1950年8月まで病院経営の拡大に力を注いだ。ペニシリンが入手可能になると、聖隷として外科手術を取り入れることを決め、東大教授だった都築正男博士を招聘する。手術関係施設設備の経費も無視して設計建設に入る。設計は後の浜松市長栗原勝であった。

外科手術の導入と成功は全国に名をはせ、年間の手術件数は広島国立病院に次ぐ全国第2位であった。

市民生活と政治は切っても切れないものであり、戦後の復興を進めるためには政治が前に出なければだめだと、1951年4月に静岡県知事に立候補するが敗退、同年9月に再び衆議院議員に当選する。初当選から7期20年間、政治と医療福祉現場の二つの場において、長谷川は医療、福祉の充実のために邁進した。

長谷川が1950年代後半から1960年代にかけての高度成長期に成し遂げた最も大きな仕事は、心臓、脳外科など新たに必要になった最新医療を提供できる病院の建設と老人福祉施設の整備だった。

長谷川はアメリカで、結核治療がすでに外科手術療法から化学製剤による療法へと移行していることを知り、日本もいずれそうなると確信していた。これからの日本も今のような大きな結核病院は不要になる、新時代の地域医療に奉仕するためには新たな分野に着手しなければならないと考えた。長谷川が考えた新たな分野とは心臓病治療であった。当時日本の死因の1位は脳卒中であったが、西欧の先進国では心臓病が死因のトップになっていた。そしてその頃東京女子医大の榊原任教授が心臓に直接メスを入れる直視下手術に成功していた。榊原教授は聖隷が招聘した都築正男教授の弟子であり、長谷川の長女・順の夫の恩師でもあった。長谷川は榊原教授に浜松での出張手術を依頼した。快諾してくれた榊原教授を三方原の聖隷病院に案内すると、「心臓病患者を片道12kmのガタガタ道で輸送すればそれだけで死に至る、心臓外科をやるなら浜松駅の近くに新しい病院をつくるべき

だ」と指摘されたが、今の病院だけでも赤字経営であり新病院の建設の余裕はなかった。事務長の山浦俊治を初め、労働組合も反対した。

長谷川は一族と有志の者だけで、35年前に開拓した聖隷社農場跡地の住吉に聖隷浜松病院を新築することを決断する。しかし借金だらけの長谷川に融資する銀行はなかった。当時国会議員に当選していた長谷川は医療施設の整備に取り組んでいた厚生省に働きかけ、一般銀行では融資困難で採算のとりにくい医療施設に長期・低利で融資するための法律「医療金融公庫法」を成立させた。これにより地元の金融機関も融資するようになり、1962年3月に聖隷浜松病院が完成する。病床114、内科、外科、循環器科、小児科、婦人科、消化器科、呼吸器科、気管食道科のスタートであった。経営難のスタートであったが、その年の6月に榊原教授の人工心肺を用いた手術成功のニュースにより患者が集まり経営は軌道に乗った。1965年には脳外科センター、1966年には遠州地方の労働界を束ねる遠労会議と提携して浜松血液銀行も開設した。そして1968年には放射線治療と人工透析を開始し、癌センター棟を完成、1969年には総合病院として認可された。さらに1970年、リハビリセンターを完成させ、ラジオアイソトープ診療も開始する。1977年には増築により未熟児センター、透析センター、レントゲン科の整備が進み、頭部X線CTも設置され、聖隷三方原病院と合同で肺ガン検診車による検診を開始した。さらに増築を重ね病院機能充実とともに、無医村への医師派遣・訪問看護等々、浜松のみならず全国規模での医療の充実を進めていった。そこには「一粒の麦もし地に落ちて死なずば唯ひとつにてあらん。死なば多くの実を結ぶべし」という長谷川の好きな聖書の言葉が実践されている。

#### (4) 特養を支える老人福祉法を成立

1961年特別養護老人ホーム「十字の園」がオープンした。寝たきり老人を世話する日本で最初の施設である。長谷川が衆議院文教委員長をしていた1958年、国連本部の図書館で、日本の老人の自殺率が世界一高いことを知り、帰国後この問題に取り組む。日本の老人の自殺要因は1位が病苦の42%で、貧困ではないことに気づいたのがそのきっかけである。「老人福祉法」をつくるにあたって、厚生省の役人が「十字の園」を訪れ介護と施設の様子を見学し、国が前に出なければできない仕事だと認識し、老人福祉法の第2条に「老人は、多年にわたり社会の進展に寄与してきたものとして、かつ豊富な知識と経験を有するものとして敬愛されるとともに、生きがいを持てる健全で安らかな生活を保障されるものとする。」とその基本的な理念が記述された。これにより全国に特別養護老人ホームが続々と開設されるようになる。さらにはホテルの利便性とプライバシーを保てる有料制の高齢者世話ホームを提案し、1973年には「浜名湖エデンの園」が開園する。

#### (5) 医療福祉を支える人材の育成

長谷川は医療と福祉の二大事業に加えて教育事業も重要視した。1949年に、現在の「わかば保育園」の敷地に「遠州基督学園」を設立した。目的は看護婦養成であり、これが中学卒業から学べる准看護婦養成所となり聖隷准看護学園につながっていく。しかし高等学校進学者が増えたため、1966年、聖隷准看護学園を閉校し、衛生看護高校として聖隷学園

高等学校を発足させた。そして 3 年後には浜松衛生短期大学を開校、現在は「聖隷クリストファー大学・大学院」も開設し、保健医療福祉の総合大学として地域に人材を輩出している。

#### (6) 精神薄弱児・者の救済

戦後復興が進む中で、不治の病と恐れられていた結核は治る病気となり、結核患者への理不尽な差別もなくなったが、それに代わって目に見えてきたのが、重い障害を背負って生まれてくる子供たちの問題だった。日本はめまぐるしい経済の発展に伴って発生した様々な公害や環境汚染によって、先天的な難病をもって生まれてくる子供の数が増えてきた。そうした子供の育成に疲労困憊した親たちが一家心中まで思い詰める現状が出てきた。そこで長谷川は障害児・者を受け入れる施設に着手する。1966 年社会福祉法人「十字の園」に重度精神薄弱者施設「小羊学園」を開設した。私財を投じて尽力したのは、長谷川と労苦を共にしてきた山浦俊治である。4 年後には聖隷保養園の中に精神薄弱者施設「やまぼと学園」ができ、3 年後の 1973 年には精神薄弱者厚生施設「やまぼと成人寮」がオープンした。この年「聖隷保養園」はその法人名称を「聖隷福祉事業団」と改めた。そして待機保育児童が増える中で、保育園事業にも進出する。

欧米の未熟児センターの情報から新生児集中強化システムで未熟児管理をしたところ、未熟児から多く発生する重度障害児が減少したとの事実を得た名古屋市立医科大学の小川次郎小児科教授から、聖隷なら可能ではないかとの話が持ち込まれた。長谷川はやるべき価値がある仕事だと判断し、第 4 期拡張工事で新生児集中強化治療施設を完成させた。同時に世界初の未熟児専用救急車が常備され、開設と同時に小川教授が赴任してきた。これにより浜松市の新生児死亡率は急激に下がっていった。長谷川はこれらのデータを基に厚生省に全国に未熟児センターをつくることを提言した。

1967 年、任期満了とともに長谷川は 20 年にわたった議員生活に終止符をうった。そして退任のあいさつとともに「政党無用論」を掲げて社会党を離脱した。理由は 1965 年 6 月に調印された日韓基本条約にあった。日本社会党は当時、朴正熙独裁政権の韓国と国交を開くこの条約の締結に異議を唱えていた。長谷川は韓国を単独訪問し、朝鮮戦争の戦禍を引きずる韓国民の様子を見聞きし、「中国と北朝鮮の情報で事実を確認せず反対するのは誤っている。長い間韓国を植民地としてきたことを謝罪して、韓国の経済興隆に努力すべきだ」と提言したが、受け入れられなかったことによるものであった。

#### (7) 医大に賭けた長谷川の思い

長谷川は 1971 年浜松市長選に立候補した。その最大の理由は、46 都道府県の中で静岡県は医療水準が 45 位、県衛生部の発表では、とりわけ西部が最低水準だという発表を受け、浜松に医科大学を建設したいという思いであった。落選し長谷川の思いは実現しなかったが、7 年後国立浜松医科大学が開校した。

おわりに

長谷川保は聖隷事業団が全国的な大組織になっても、自らは三方原の粗末な1軒屋に住み続けて一生を終わった。あまり裕福でない家庭に育ち、クリスチャンとなり、博愛の精神をバックボーンに一生を貫いたとあってよいのではないか。その精神は日本社会党の理念と合致し、国会議員として福祉政策の推進者として立法・行政に関わり続けた。

その長谷川の周りには福祉活動にみずからの生き方を投入しようとする者が集まった。

浜松市に社会福祉法人天竜厚生会がある。厚生会は、戦後自分の生活もままならないなか、国立結核療養所天竜荘で出会った結核回復者を中心とした8人により、結核療養者の社会復帰の道を探る熱い思いが周りの人を動かして出来上がった組織である。1950年のことであった。その後、子どもの増加と減少、日本の復興と女性の社会進出、高齢者の増加という社会の変動に対応する多くの課題が生まれてきた。天竜厚生会は、そうした課題を解決すべく、行政より早く多様な福祉事業を引き受けてきた。

またわが国最初の精神薄弱者の総合施設である安倍学園・安倍寮を創設した寺田鍊がいる。寺田は戦後静岡県教職員組合の初代委員長に就任、教職員の共済制度を全国に先駆けて発足させ、また公選制下の静岡県教育委員としても活躍し、その後福祉の道に入っていた。それは当時社会から見放されていた精神薄弱者と共に生きることであった。静岡市に創設された安倍学園の事務長には、長谷川保の秘書八谷裕司を招いた。苦しい経営が上向いた頃、寺田は県西部にはなかった精神薄弱者施設をつくることを提言した。

八谷は1966年社会福祉法人明和会を設立し、翌年3月に袋井学園を創設した。八谷は、その後も財団法人日本精神薄弱者愛護協会会長を務めるなど、全国的に精神薄弱児者の救済、更生運動に尽くした。社会福祉に専念した長谷川保、寺田鍊、八谷裕司のつながりが、ここにある。

長谷川が客観的資料にもとづき時代を先取りして、浜松という地方都市で福祉・医療活動を進めたことにより、遠州地方の福祉・医療分野の水準を引き上げた功績は大きい。また福祉の問題を市民活動だけで解決することの困難さを察知し、政治の世界に入り、現場と政策をつなげ、全国的な福祉・医療分野の進展に果たした役割も大きいといえよう。

#### 【参考資料】

『聖隷60年の歩み』（聖隷福祉事業団）

山内喜美子『聖隷長谷川保の生涯 日本ではじめてホスピスをつくった』（文藝春秋、1996年）

高崎恵「聖なる隷（しもべ）をめぐる文明化の諸相：文明化装置としてのキリスト教」（『国際基督教大学学報 3-A, アジア文化研究』45号、2019年）